琉球大学学術リポジトリ

沖縄音楽療法研究会創成期における実践活動の記録：前嵩西末子と平良サヨ子の実践

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学教育学部音楽科 公開日: 2016-01-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: シャイヤステ, 榮子, Shayesteh, Yoko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/33187

沖縄音楽療法研究会創成期における実践活動の記録

―前嵩西末子と平良サヨ子の実践―

琉球大学教育学部音楽教育教室
シャイヤステ　榮子

日本で初めて音楽療法に関する文献が出版されたのは 1958 年精神科医の蜂矢英彦によってであった。1959 年、山松質文が自閉症児に対する音楽療法の実践を始め、1966 に『ミュージックセラピー』を出版し、1967 年の英国人の音楽療法士ジュリエット・アルバン来日によって日本は音楽療法の創成期を迎えることとなる。

その年には、山松は障害児教育の加賀屋哲朗とともに日本音楽療法協会設立、1976 年には櫻林仁が日本音楽心理学音楽療法懇話会を発足、1977 年には赤星建彦が財団法人東京ミュージック・ボランティアを設立することとなる。

1980 年代には、医師を中心に音楽療法の効果の客観性や科学的な効用が問われるようになり、1986 年には日野原重明や篠田知璋らが日本バイオミュージック研究を設立、1987 年には村井靖児が東京音楽療法協会を設立した。

1990 年代に入ってからは、理論と更なる実践の量的・質的研究を求め日野原重明を代表とする日本バイオミュージック学会が 1991 年に設立、1994 年には松井紀和・村井靖児によって臨床音楽療法協会が設立された。音楽療法への興味・関心は首都圏から地方都市へと広がり、時を同じくして、1994 年に岐阜県音楽療法研究所が設立、そして奈良市では音楽療法検討委員会が発足し、音楽療法士養成や認定へ向けての養成コース開講や講習会等が始まっていた。1996 年には岐阜県音楽療法士、1997 年には奈良市音楽療法士の第一期生が認定された。

1995 年、日本バイオミュージック学会と臨床音楽療法協会は全日本音楽療法連盟へと統合され、音楽療法の啓発と普及活動と同時に会員の資質向上を目指して活動を継続し 1996 年には 100 名の音楽療法士の資格認定をした。同連盟は音楽療法士の国家資格を目指し組織を発展させて 2001 年には日本音楽療法学会を発足させ日本国内では最大の学会員を持つ組織として現在に至っている。

沖縄県のピアノ教師へ影響を与えた岐阜県音楽療法研究所

この様な音楽療法の潮流の中で、音楽療法に興味を持ったピアノ指導者が沖縄県内にもいた。1994 年 (平成 6 年)5 月、母親の入所する老人福祉施設で音楽療法プログラムを始めたばかりの前嵩西末子であった。前嵩西末子は友人で意を同じくする同志でもある平良サヨ子と共に、

同年 11 月に全国に先駆けて発足したばかりの岐阜県音楽療法研究所の第一回研修会に参加した。

岐阜県の梶原拓岐阜知事が「夢おこし県政」を掲げ当選した頃、岐阜県山県郡の住民の声を聞く「ガヤガヤ会議」で、認知症になった父親に若い頃愛唱歌を歌って聞かせたところ、表情が和やかになって言葉が増えたとの話を知事は聴いた。それがきっかけとなり、1994 年 (平成 6 年)4 月、音楽療法の研究・情報発信をめざす公的機関としては全国初の県立の研究所岐阜県音楽療法研究所の開設となったのである。

知事は高齢化社会到来を射程にいれ、県民の心身の健康維持のために音楽を活用する事業に着手した。研究所は、福祉事業団に所属し「人生 80 年代の到来に向けて、老後を楽しく、いきいきと健康に過ごせるため」を事業目標に掲げ老人のための音楽療法に力を置いた活動を始めた。研究所は、日本大学病院で高齢者の音楽療法に取り組んでいた門間陽子を所長として迎えたのである。岐阜県音楽療法研究所は、1994 年 11 月、高齢者分野を中心とする第一回研修講座を実施した。その研修講座に前嵩西末子と平良サヨ子は参加したのである。

老人保険施設における音楽療法の試み

前嵩西と平良の音楽療法プログラムは 1994 年 5 月から 1998 年まで週に一回 50 分実施された。プログラムは参加者自身が歌ったり演奏したりする能動的音楽療法を中心に据え、平良がプログラムを進行し、前嵩西は伴奏とプログラム計画を担当した。

デイケア利用者への試み (初期 5 月・6 月)：　最初の 2 ヶ月は、デイサービスを利用している 70 才から 90 才までの 15 名であった。プログラムは、リズムトレーニング、分担唱、合奏が中心であったが、利用者の方々には不評だったようである。

利用した曲目は「おかあさん」、「汽車」、「大きな栗の木の下で」、「ぶんぶんぶん」、「手をたたきましょう」、そして「幸せなら手をたたこう」等の幼稚園や小学校で歌われる唱歌が中心であった。この 2 ヶ月の試みで、高齢者の特性を理解した選曲や板書方法に改善が必要であると反省をさせられた。リズム練習では沖縄民謡が有効であることは初期体験での収穫であった。

入所施設利用者への試み (7 月以降) 研修参加後：　プログラムを初めて 3 ヶ月目から同老人保険施設に入所している約 50 名の高齢者に実施する事になった。

初期の反省から、下記に示したように利用者の方々が親しみのある唱歌や流行歌、そして沖縄民謡から選曲した。

《唱歌 39 曲》	《流行歌 10 曲》《軍歌 10 曲》	《沖縄民謡 18 曲》
めだかの学校、富士の山	銀座カンカン娘	安里屋ユンタ
うさぎ、うさぎとかめ	二人は若い	とうがにーあやぐ
村のかじや、花	露営の歌	鳩間節
桃太郎、大きな栗の木の下で	愛国行進曲	なーすび節
春が来た、富士の山	戦友	デンサー節
鳩ポッポ、雨降りお月さん	敵は幾万	だんじゅかりゆし
虫の声、もみじ	軍艦	愛の雨傘
かたつむり	同期の桜	伊佐へいよー
運動会の歌、海	若者ワルツ	ましゅんく節
紀元節、てくてく歩く	馬進軍歌	海のチンボラー
夏は来ぬ、一羽のカラス	海ゆかば	てぃんさぐの花
茶摘み、お母さん	麦と兵隊	ちんぬくじゅうしいー
赤い靴、汽車	ああ玉杯に花受けて	加那よー
かごのとり、かかし	となり組	久高まんじゅう主
七つの子、村の鎮守	お富さん	トウバラーマー
月の砂漠、ふるさと	船頭小唄	汗水節
赤とんぼ、ほたる	鐘の鳴る丘	上がり口説
きんたろう、荒城の月	雨に咲く花	祝節
春の小川、きよしこの夜	湖畔の宿	
こいのぼり、お正月	りんごの歌	

上記の 77 曲の一曲を除いては、初期の 2 ヶ月と比べると新曲である。唱歌にでも、高齢者の方々が、幼少期に親しみ、尋常小学校の唱歌の授業で学んだ歌である。季節感を感じさせる曲や、行事で歌われた曲である。また、流行歌も若かりし頃に大衆歌謡としてラジオから流れていた曲であり、太平洋戦争期に青年期にあった参加者達が口ずさんだ曲である。また、沖縄民謡はふるさとの祭り・祭祀や村遊びで歌い踊った生活に根付いた音楽である。

前嵩西と平良の実践では、「お母さん」の歌をうたうといつも涙を浮かべ「お母はんってええな」と大阪弁で語る 73 才の女性や、演歌を歌うことが生き甲斐でプログラムの一番先に来ている 74 才の男性の好みを把握し、参加者一人一人の音楽との関係を観察しながら、音楽療法プログラムの効果を観察している。　例えば、事例①笑顔の素敵な A さん (女性 91 才) は、プログラム中いつも寝ているように見えるが、みんなが歌うとうなり声が聞こえるが音楽に合わせてうなっているようである。次第に起きている時間が長くなり、全プログラムに参加できるようになった。事例②耳の不自由な B さん (女性 95 才) は、耳元で静かに拍を取りなが

ら歌うと一緒に歌い始める。歌を歌うのは随分久しぶりだと涙を浮かべた。事例③いつも元気なＣさん（女性 90 才）は、いくつかの病気を抱えているがいつも明るい。前嵩西が曲の一節でも見落とすと指摘する。Ｄさんにとって音楽は健康のバロメーターである。事例④今は亡きＥさん（女性 97 才）は、一度も歌を歌う事はなかったが、民謡を弾くといつも踊った。事例⑤静かなＦさん（女性 97 才）は、前嵩西と同郷と分かり出身地の民謡を歌うようになった。歌詞を良く記憶しており、発音も明瞭で音程もしっかりしている。事例⑥声の綺麗なＧさん（女性 90 才）は、皆と声を合わせて歌う事が苦手だが、自分一人の世界に浸って満足感を得ている。

上述の参加者以外にも、沖縄民謡「加那ヨー」にあわせて部屋から身を乗り出し、足取り軽く拍子を取りながら歩き始めたり、打楽器で自由にリズムを打ち踊ったり、褒めあったりして微笑みを交わしている。前嵩西らは、徐々に利用者らの名前を覚え、アイコンタクトができ、手を触れたり、コミュニケーションをとることが出来るようになった。集団としての和を尊重しつつも個人の主張を認めることによって、歌でも話でも、一人一人の特徴が少しずつ把握できるようになった。セッションを効果的にするために、セッション前に太鼓を叩いてみたり、まったく音楽を演奏せずに、お話しや笑い話しから始めたり、前嵩西らと対象者の間には連帯感が感じられるようになった。最初のころは、全く無関心で遠くから眺めていた利用者も実はセッションに耳を傾けていることに気づいた。元校長先生は、絵の話をすれば話が弾んでくることもわかった。

前嵩西と平良の試行錯誤で始まった高齢者の集団音楽療法は、開始以来半年を経て岐阜県音楽療法研究所の第一回研修講習会に参加する事で大きく内容が変化していった。この施設での音楽療法を始めて３年目の 1997 年５月のプログラムは、下記のように初期とは大きく変化している。

① 始めの歌「今日拝なびら」でプログラムが始まる。高齢者に馴染みのある琉球音階で「みなさんこんにちは！お元気でしょうか？御一緒に踊って遊びましょう！」という沖縄方言の歌詞を持つ。前嵩西らがこのプログラムの参加者のために作詞作曲した楽しさを予感させるようなはじまりのうたである。

② 出席取りは、認知症の利用者たちの今の状況を正しく把握させるトレーニングで見当識確認のための訓練である。今日の日時や自分の名前の確認や健康状態を確認するための短い会話を交わす。

③ ストレッチ体操をする。車椅子の利用者も腰掛けたままで比較的元気な利用者とともに前に出てもらい思い切り声を出す。音階と拍を感じながら規則正しく集団で実施する。

④ 野菜シリーズは、高齢者は若い記憶は蘇りやすい。野菜を用いた会話により、先週と今週の記憶を結びつけ、それにより自信と話題を提供し、気持ちの変化をねらった。一つの野菜から匂いから、過去の回想が起こり、遠のいていた意識の回復があり、表情が乏しい認知症の方の表情が豊かになる。

⑤ 今月のテーマソング、毎月歌を決めて歌っている。今月は沖縄民謡の「国頭サバクイ」である。合の手 (イーヒ、イソ、ウフ) を使い歌い始める。
⑥ 民謡・唱歌コーナー、お年寄りの好きな曲を個人や全員で歌う。

プログラムの計画を立てる際には、アセスメントで利用者の状況把握をし、それに基づき長期目標を設定し、更に短期目標を立て評価方法を設定し、具体的なプログラムを計画している。これは、音楽を療法として活用する為の質的な研究を目的にし、医学・心理分野の視点に立脚する治療法の手順を踏んでいるものである。これは、前嵩西らの実践と研修会で学んだ成果といえよう。

1994 年から 1998 年までの 5 年間のプログラムの課題・成果として 5 点挙げている。先ず、治療構造・過程において、意図的に設定するもの、偶発的に生まれるもの、そして音楽療法士とクライアント間で自然に形成されるものが存在する。次に、沖縄では沖縄における文化的特性が強く、民謡の存在は避けられない。更に、利用者は演歌や流行歌に馴染みが深く、やもすると、西洋クラッシク音楽や学校音楽に馴染みの深いセラピストにとっては曲のジャンルを広げる必要がある。そして、利用者の方々の中には、字が読めない方や方言の分からない方等が混在する集団療法の場合は配慮が必要となる。最後に、戦争経験者が多い。軍歌を歌って泣き、昔を思い出す。いろいろ体験したことが風化しつつもそのことが痛みではなく、生きた証しになっていることがわかった。

この施設での音楽療法プログラムは 2004 年までの約 10 年間続いた。

第 1 回沖縄音楽療法研究会：研究会準備会議

前嵩西末子と平良サヨ子の音楽療法に対する探究心は、上記の老人保険施設に留まらなかった。沖縄ピアノ同好会の同志に働きかけて、音楽療法の勉強会を発足した。1997 年 1 月 31 日のことである。場所は前嵩西邸であった。参加者は前嵩西、平良、座波玲子、そして永山和歌子の 4 名でのスタートであった。第 1 回研究会では、研究会細則を決定した。

勉強会の名称は、沖縄音楽療法研究会、役員構成は世話役を前嵩西末子と平良サヨ子、書記は永山和歌子、会計は座波玲子、活動日は毎週金曜日午前 10 時から 12 時まで、場所は毎回決定、会費として年間費千円と活動費五百円を徴収、活動内容は月 1 回の施設見学とレスリー・バンド著の「音楽療法」の読み合わせ学習と決定した。活動期間を 2 月から 7 月までとした。

更に、会が持たれた時の県内外の関心事を書き留めてある「今日の時事」、研究会の主な目的である音楽療法の文献学習内容を簡潔にまとめた「今日のお話」、そして最後にその日の参加者リストを記録として残すことに決めた。以下の研究会の内容は、前嵩西が自宅に保管してあった記録簿を参考にしている。

沖縄音楽療法研究会の活動

第 1 回目の研究会では、半年という期間を決めていたが、最終的には 10 月 13 日までの約 10 ヶ月となり全 21 回の研究会となった。音楽療法の知識と技術への渇望が、多忙な日常生活と仕事の中で、毎週金曜に集い、レスリー・バンド著の「音楽療法」をお互いに読み合わせる事に集中させた。それは、1997 年 2 月から 6 月 6 日の第 18 回の研究会で完了した。その後は、W.B. デイビスらの『音楽療法入門（上）理論と実践』へと移っていった。しかし、その年の 9 月に第 1 章を 10 月に第 2 章という計画を第 20・21 回の記録簿に残しこの研究会の記録は終えている。最後の記録簿には、これからの一年間田場盛信を迎えて三線のレッスンを始める事が記述されている。更に、新城ひとみによる唄を歌う時間を設けることも記載されている。その頃には、新城ひとみは第 2 回目から研究会の会員となっており、第 7 回研究会から石川静枝と具志堅由野が、第 10 回研究会から竹内元子が加わり研究会員は総勢 7 名となっていたが沖縄音楽療法研究会としての活動の小休止と決めたのであろう。

前嵩西らは、この一年間、研究会での文献学習だけではなく、積極的に県外の音楽療法関係の行事に参加している。

① 2 月 8 日から 11 日までの東京有楽町「東京国際フォーラム」で「ザ・パワーオブ・ミュージック音楽療法フォーラム 97」に参加し、特別講演、研究発表や講習会等に参加し、その成果を研究会に持ち帰り、第 2 回、第 3 回、第 5 回研究会で他の会員と共有している。

② 3 月 17 日と 18 日には、シンポジューム「長寿科学研究の将来」に参加した。

③ 3 月 27 日には、岐阜県音楽療法研究所を訪問している。

④ 10 月には、「多文化間精神医学ワークショップ」に参加し高江洲義英の講演を聴いて大変感銘を受けている。

以上の講演会、学会、訪問以外にも、沖縄県立芸術大学へ行ってインターネット検索で海外の音楽療法の情報収集をしている。更に、沖縄音楽療法研究会の定例会では、文献の読み合わせだけではなく音楽療法の現場で使える手話や、体操、歌唱、鑑賞等のワークショップも始めている。更に、各々の会員の現場での問題解決に知恵を出しあったりもしている。例えば、ピアノ教室での多動症候群児童への理解と対応についてや、レッスンにおけるリトミックの引き継ぎの仕方について、リトミッククラスの指導について、大正琴の稽古におけるリラックス体操の動作の効果について、音楽療法時におけるビデオ撮影の検討について、ピアノ以外の楽器による伴奏の必要性について等など多岐にわたる。

音楽療法研究会報の発行

1999 年 (平成 11 年)3 月、「音楽療法研究会報」が前嵩西末子と石川静江の編集で発行された。これは、前回、沖縄音楽療法研究会の例会の記録簿とは異なる。研究会員への会報であり、

次回の研究会の案内と前回の研究会報告が主な内容となっている。2000 年も引き続き発行されているが 7 月でそれを終えている。その活動内容をそれらの会報を資料として提示してみる。その内容は正に県内における音楽療法の啓蒙・普及活動である。

1999 年の活動は第 3 期、2000 年は第 4 期と記されている。

第 3 期平成 11 年度

《第 1 回研究会》が、平成 11 年 3 月 9 日にハーモニーセンターで開催され、第 3 期平成 11 年度の沖縄音楽療法研究会の再活動の幕開けとなった。

決定事項は、①活動期間・6 ヶ月間　②活動日・毎月第 1 水曜日 PM7:30 ～ 9:00　③会費毎月￥500 徴収と決定。研究会では、毎回の研究会に招待する講師の選択や講師への要望が話し合われた。研究会への参加者は現在音楽療法活動をしているか、これから音楽療法を学びたい方々約 17 名を予定している。研究会の内容は以下のとおりである。

《第 2 回研究会　平成 11 年 4 月 7 日》某ゴルフレンジ

テーマ：ふるさとの音楽療法

講　師：高江洲義英（いずみ病院院長）

《第 3 回研究会　平成 11 年 5 月 12 日》ハーモニーセンター

テーマ：精神科音楽療法―閉鎖病棟での音楽療法セッション―

講　師：服部由美（いずみ病院音楽療法士）

《第 4 回研究会　平成 11 年 6 月 2 日》某ゴルフレンジ

テーマ：ふるさとの音楽療法 I

講　師：高江洲義英（いずみ病院院長）

《第 5 回研究会　平成 7 月 7 日》某ゴルフレンジ

テーマ：療育音楽プログラム―概要の紹介とセッションの現場から―

講　師：具志堅由香

《第 6 回研究会　平成 8 月 4 日》セミナーハウス

テーマ：クリニカル　インプロビゼーションとしての音楽療法

講　師：高良幸人

《第 7 回研究会　平成 9 月 1 日》某コルフレンジ

テーマ：リズム音楽を介して A.D.L 拡大ができたケース

講　師：砂川明美（サマリア人病院）

《第 8 回研究会　平成 11 年 10 月 6 日》某コルフレンジ

テーマ：トーンチャイムの使い方（1）

講　師：前嵩西末子

《第 9 回研究会　平成 11 年 11 月 10 日》セミナーハウス

テーマ：ふるさとの音楽療法（Ⅱ）

講　師：高江洲義英　(いずみ病院院長)
《第 10 回研究会　平成 11 年 12 月 1 日》福祉センター
テーマ：学会発表までの道のり―日本芸術療法学会への発表から―
講　師：服部由美 (いずみ病院音楽療法士)
《第 11 回研究会　平成 11 年 1 月 12 日》セミナーハウス
テーマ：脳波からわかること（Ｉ）―α波とは何ぞや―
講　師：緒方茂樹（琉球大学教育学部障害児教育教室助教授）
《第 12 回研究会　平成 11 年２月２日》福祉センター
テーマ：遊びを体感してみよう―指遊び手遊びを通して―
講　師：平田美紀　（沖縄女子短期大学児童教育科）
《第 13 回研究会　平成 11 年３月１日》セミナーハウス
テーマ：懇親会

平成 11 年度の第３期研究会に引き続き、平成 12 年度第４期研究会が始まった。
第４期平成 12 年度
《第１回研究会　４月５日》いずみ病院、院内見学（18：30 ～ 19：15）
テーマ：老人の音楽療法
講　師：服部由美（いずみ病院音楽療法士）
《第２回研究会　５月 10 日》いずみ病院、院内見学（18：30 ～ 19：15）
テーマ：精神科における音楽療法
講　師：服部由美（いずみ病院音楽療法士）
《第３回研究会　６月７日》いはらクリニック院内見学（18：30 ～ 19：15）
テーマ：障害を持った方の音楽療法―笑う門には花が咲く―
講　師：高良幸人（いらはクリニック音楽療法士）
《第４回研究会　７月５日》あけもどろ学園
テーマ：音楽クラブの活動について
講　師：新垣恒子（あけもどろ学園）
《第５回研究会　８月２日》福祉センター
テーマ：高齢者への音楽療法―セッションの進め方
講　師：平良サヨ子

以上５回目の研究会を持って沖縄音楽療法研究会報は終わっている。
研究会に講師を招いて、その講師の音楽療法の専門に関する講演を依頼している。音楽療法の現場である病院や施設を訪問して音楽療法プログラムの現場を参観したいという欲求も会報から伺える。平成 12 年４月５日の第１回研究会からは半年間の予定で職場見学をし、そこ

で、ワークショップを実施している。いずみ病院内のいずみ苑見学と高齢者の音楽療法のワークショップ、また、いずみ病院精神科病棟の見学と精神科の音楽療法のワークショップ、いらはクリニック見学と障害のある人たちの音楽療法、障害者支援施設のの園内見学とそこにおける音楽クラブ活動のワークショップが実現した。

また、研究会参加だけではなく、県内で実施された音楽療法の講習会や日本芸術療法学会全国大会へも参加・協力し、前嵩西らの音楽療法やその関連分野への興味は一層深まっていった。研究会の講師依頼や芸術療法学会への参加・協力がいずみ病院との繋がりを深め、徐々に沖縄音楽療法研究会の活動はいずみ病院内へと合併・統合されていった。沖縄音楽療法研究会はいずみ病院に事務局を置き、活動を継続し、研究会報は平成 27 年度現在で 19 巻目を発行している。

参考資料

音楽療法研究会会議録　1997 年 1 月 31 日～ 1997 年 10 月 20 日分まで。
音楽療法研究会報　平成 11 年 3 月発行～平成 12 年 7 月発行まで。
前嵩西末子・平良サヨ子インタビュー、2012 年 11 月 10 日。
前嵩日末子インタビュー、2015 年 10 月 9 日、前嵩西邸にて。